

今治 いまばり Towel & Towelling

VOL.2
3MAR.2000

今治タオル人物マップ

中村忠左衛門と文化織

お大師さまのくれた緯管

「想いを売る産地」を目指そう

生活の中のタオル 海外の暮らし②英国篇

ロンドンでタオルをさがす

私とタオル

羽仁未央・今井久仁恵・武内宏司・小田迪夫・吉岡多間

間を感じさせる布

タオルでひとやすみ

タオルの進化論

今治藩とタオル城下町

今治はタオルのまほろば

船のファッションロードと、ヒーリングファッションスポット

今治はタオルのまほろば

タオルづくり大好きな産地「愛媛県今治」は瀬戸内海にあって、広島県に向けて突き出た高縄半島に位置し、町の「前」には日本三大潮流の一つ来島海峡が中小の島島の間を抜けて潮が走る個性ある海峡。激しく流れ、もみ合う潮流は多量のマイナスイオンを周辺に発生させ、沢山のプランクトンを生み、小魚を招き豊かな漁業資源を形成する。海上では九州、阪神間の主要航路で、大型フェリー、冷凍船、タンカー、貨物船等1日に千隻余も行き交う船のファッションロードであります。又町の「後」には、高縄山系の複層林、腐葉土、花崗岩、まさ土等をくぐり抜けてきた清冽な水を今治地方に送り込み、さらに四国八十八ヶ寺霊場が周辺を囲むが如く配置され今治地方は現代人の心を癒す、ヒーリングファッション

スポットと呼ぶにふさわしい。今治の町は「前」と「後」にすばらしい「自然の恵み」と「現代の癒し」を合わせ持つ、世界に例をみない舞台を持っており、「タオル」に選ばれた生産地と云えるでしょう。「場所」、「不純物の少ない軟水」、タオルのメニューを豊かにする「糸の味」、市民と云うサポーターの存在、そして、分業という生産協力集団、等によって多様なタオルの味を表現する。

その「今治」で百余年の蓄積された織布技術から新しい分野（脱拭くタオル）への開発がスタート。一種類の経糸で織る綿布織機に比べて、



二種類の張力の異なる経糸で織るタオル織機から開発された布はまるで和紙のように軽く、膨らみと、風合い

を有し、触れる人に優しさや温もりを感じさせます。

Tシャツ、トランクス、肌着、ジャケット、子供服、パジャマ、マフラー、スカーフ等。そして室内インテリアでは、カーテン、テーブルクロス、クッション等々新しい商品の提案がはじまっている。

インフォメーション — イベントガイド

①第4回今治タオルフェア
12年5月13日(土)~14日(日)
タオル販売ほか

②第5回今治タオルフェア
12年10月14日(土)~15日(日)
タオルの新商品展示及び販売ほか



【瀬戸の暮色】宮崎 進
今治しまなみ海道絵画展出品作品
平成11年/2000F/油絵、アクリル等ミクストメディア/油彩

●表紙●

“来島海峡暮色”

私は潤むような瀬戸の光や風にひかれる。この春、尾道から島づたいに今治に渡ったが、差しかかった大島の亀老山から見る瀬戸の暮色に思わず息をのんだ。深い赤紫色の海に、黒く沈む島影が重なって、まるで浄土世界を見るようで胸に刻まれて忘れられない。

宮崎 進

1922年 山口県徳山市に生まれる
1942年 日本美術学校卒業
1967年 第10回安井賞受賞
1986年 宮崎進の世界展(池田20C美術館)
1992年 個展(New Yorkアルファスト・ギャラリー)
1998年 芸術選奨文部大臣賞受賞
神奈川文化賞受賞 宮崎進画集「森と大地の記憶、私のシベリア」文芸春秋刊
多摩美術大学名誉教授 多摩美術大学付属美術館館長

テキスタイル・レポート今治 Vol.2

発行日/2000年3月 発行/ (株)今治織維リソースセンター 〒794-0033 愛媛県今治市東門町5-14-3 テクスポート今治 TEL.0898-23-8700
編集発行人/集積活性化委員会 委員長 宮崎 弦 監修/四国タオル工業組合 デザイン/デザイナーズクラブいまばり 印刷/原印刷株式会社
本誌に関するご意見・ご要望がございましたら事務局までお寄せください。



中村忠左衛門と文化織

橋をかけよう でっかい橋を

今治からだよ 尾道へ

瀬戸内海の うず潮こえて

橋をかけよう 天高く

男の夢は 虹よりでかい

昭和四十二年に発売した架橋推進歌「でっかい夢」の一節で、吉田正が作曲し、フランク永井が歌った曲である。

その、「夢の架け橋」が現実のものとなるのに、それから三十年の歳月が経過し、この春（一九九九年五月）に全通した。連日のごとく利用者でにぎわい、今治の地を全国の知名度に押し上げる役割をはたしてくれている。

「タオルの町」としてその名を知られていた今治に、もう一つ全国に通用する顔ができたわけで、大変嬉しいことだ。

さて、その「タオルの町」としての今治を今日のごとく日本一といわれるまでに発展させた要因は次の三点ではないだろうか。
（一）着社川の伏流水という水質の良さに恵まれたこと。
（二）中興にその人を得たこと。
（三）江戸時代以来、綿糸の産地としての基

盤があったこと。などである。

その「中興の祖」として、今治タオルの歴史に名をとどめている人物が、中村忠左衛門その人である。

明治二十七年に、阿部平助によってこの地にタオルの種が播かれ芽がふきかけたのだが、彼の本業だった伊予ネルを産業革命の軌道にのせるため、残念ながら六年後にタオル部門から撤退を余儀なくされたのだ。

そのうち数社が細々と生産を続けていたが、全くもって風前の灯だった。

ところが明治末年頃に薩常三郎なる人物

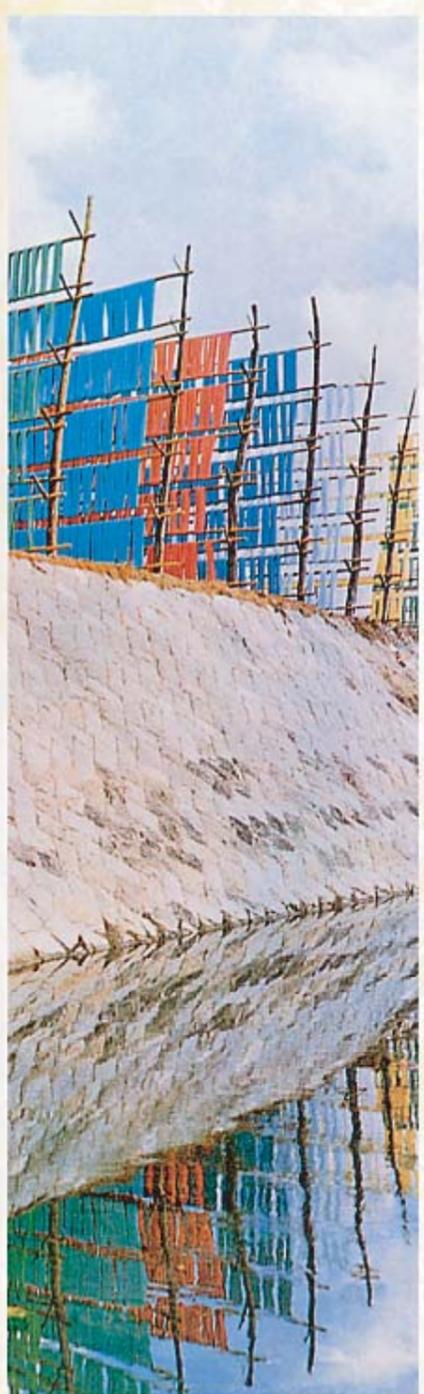
によって「二挺箆バツタン」という製織法が発明され、一挙に今までの二倍の生産が可能となった。そのことが契機になりタオルに転業する業者が急増し、にわかにならタオルは活況をたいていくことになる。

そうした折、まさに雲が龍を呼ぶがごとくに登場したのが中村忠左衛門だった。彼はそれまで他産地より格段におくれていた製品改良や技術開発に次々と手をつけ、今治タオルのレベルを一挙に引き上げたのである。

忠左衛門は、明治十五年に今治の別宮で

中村市治の五男として生まれた。学卒後に、「備後がすり」の技術を習得するため、今治のすぐ沖合いにある島、大島の友浦地区の工場につとめたが、本場の備後産地の織物に押され工場はまもなく閉鎖されてしまった。

そこでやむなく今治に帰り、当時の新興織物だったタオルに目をつけ、それに自分の未来を賭けてみることにした。
早速、自宅の二階に織り機を据え、試織をはじめたのだ。ときに明治四十三年、



忠左衛門二十四才の春である。

それから三年後、たまたま原糸の買いつけで大阪に出張中、船場の店でタオルの先晒（タオルを織る前に原糸を白く晒しておくこと）ものを売っているのを見た時、彼の脳裏にインスピレーションがひらめいた。

それにヒントを得て、今治に帰ると早速先晒の糸の一部を色に染め、縞模様（今でいうかすり模様）のタオルを製織し、大阪市場に出したところ絶大な人気を博し、飛

ぶように売れたのだ。当時、タオルは

白いものであると思われていただけに、色付き縞タオルの登場は画期的なものだった。

「縞タオル」が爆発的に市場を席捲することにより今治の機屋も伊予もめんからの転業者が相つぎ、産地としての生産規模は飛躍的に拡大したのである。

「徹で好奇心が旺盛だった彼の性格が、新興織物であったタオルに向いていたのか、毎日、夜を徹して製品の改良と創意工夫にとりくんだ。

綿布の織り組織からヒントを得て創案し

た「元禄模様」や「文化織」をつぎつぎと世に送りだし、そのどちらもが業界はじまっていた空気の売れゆきをしめした。文化織はタテ糸の変化によって両端のヘムの部分に渦巻き模様を織りだす特殊な織りで、特許を得た大ヒット商品だった。

「先晒し縞タオル」が忠左衛門の発案で世に出てからわずか五年ほどの間に、今治のタオル生産は二十倍以上に増大し、今日におよぶ日本一のタオル生産地としての基

盤が確立され、中興の祖として彼の名前を

不朽のものとしたのである。
彼は昭和二十年に六十四才で寿命をまっとうしたが、彼が生前いつも口にしていた「決して人をだましてはいけない」との遺訓は、子から孫へと脈々として受け継がれ、中村家の家訓としていまでも事業経営の中に厳として生きつづけている。

阿部克行

（市民文芸誌「どんどび」代表者）

お大師さまのくれた緯管

文・絵 和田良馨

前に座って織りはじめる、さきのお坊さんが戻って来て、

「……じつは、すまんことじゃが、……その織

り前の裂を少しばかり分け

てもらおうことはできんじや

ろうか」

「いいいます

……、

このお坊さんは、織り前の

裂を何にする

のであろうか

とあやしみ、せっかく糸を組み合わせて織りはじめたものを、と思いましたが、もと

もと気のやさしい娘さんは、

「へえ、かまんぞね」

とおしげもなく、一尺あまりを切りとつ

て、そのお坊さんにあげました。

お坊さんは、

「ご奇特なことよ」

と合掌して、その織り前の裂をしまつと、

糸を巻く緯管を一つ取り出して、

「この緯管をだいにしなさい」

とお経を唱えながら西の方へ向かってと

ぼりとぼりと行きました。

娘さんは糸をかまえて、さわやかな顔で

また織りはじめましたが、その日にかぎつ

て緯管の糸は終わりません。娘さんは不意

に思いましたが、その次の日も糸は終わ

らず、幾日も幾日もつづくので、あの旅の

お坊さんからもらった緯管を開いて中を見

ましたが、これといって変わったところも

なく、そのあと、すぐに糸は終わりにな

りました。

そこで、あっ、と気がついた娘さんは、

「ああ、あのお坊さんはお大師さんじゃっ

たんじやなあ。織り前の裂をおあげしたお

返しに、と、いつまでもつづく緯管をおく

れたのに……。緯管を開けてしもたけん」

と手を合わせたということでした。

それからのち、機を織る人は、決して緯

管の中をのぞくことはいわれられていま

す。

またその地方いっさいは、娘さんにあや

かり、お大師さまのゆかりの札所をお参り

する人々にたいしても、「おせつたい」を

するようになったのだ、といわれています。

（弘法機）

注：緯管は緯糸を巻くもので、棒に入れて緯糸をくく

らせながら左右交互に動かしてゆくものです。



むかしむかし。
旅によごれたお坊さんが、瀬戸内の海をながめながら里に来て、とある軒先きに立ち、しずかにお経を唱えはじめました。
すると、坐って機を織っていた娘さんが、お懐いっばいの変をすくって出て来て、托鉢に入ると、旅のお坊さんは念積して、しずかに去って行きました。そこで、娘さんが機

「想いを売る産地」を 目指そう

今治タオル産地のこれまでの努力は、正当に評価されてきたのだろうか。
「どうして、情熱と努力の傾け方を見直してはどうか。」



森 孝之
大垣女子短期大学教授
ライフスタイルコンサルタント
1938年、西宮市生まれ。
京都工芸繊維大学工学部卒。
伊藤忠商事、ワールド取締役、
ノーブルグー社長を経て現職
著書に「想いを売る会社」
「このままでいいんですか」など。



信用の化体

その昔、これに似た疑問を抱き、悩んだ人達がいる。若かりし頃のウォールト・デイズニーとJ・C・ホールである。
二人はやがて一つの答えにたどり着く。
「モノを売っているのはダメだ。人々は幸せや安らぎを求めているんだ」と。

絵はがき屋を営んでいたJ・C・ホールは、直ちに絵はがき作りを止め、その機械や印刷インキを生かして世界最初のグリーディング・カードを創り出した。ホールマーク・カード社の誕生である。その後、ウォールト・デイズニーは世界最初のキャラクター「ミッキーマウス」を世に送りだしたり世界初の天然色長編アニメーション映画「白雪姫」を打ち出したりする。
二人は、幸せや安らぎを届ける努力を傾けながら、ウォールト・デイズニーやホールマーク・カードと言う名前を核として、その努力を全て結晶化させる工夫をした。つまり、「信用」という形のないものを「ブランド」という形のあるもの」に化体し、安らぎや幸せのシンボルにしたわけである。

消費者の進化

やがて、目先の幸せや安らぎを求めているだけではないけな、と気付く賢い消費者が現れるようになった。ウォールト・デイズニー社は越年セレモニーの風船飛ばしを止めたり、ホールマーク・カード社は森林再生を保證するバルブしか仕入れなくなったりした。

ドイツやアメリカでは、「見かけや品質が良く、しかも安いもの」を消費者が求め

たから、企業は「自然破壊や資源枯渇に走った」と気付く消費者さえ現れた。そして、マグロの缶詰を例にとれば、イルカを一緒に捕るようなことはしてはいけないと保証した製品を選び、高くて買いはじめた。

やがてこうした賢い消費者が日本でも台頭するに違いない。さもなくば、日本の市場は草刈り場のようにされてしまうだろう。逆にヨーロッパではデイズニーランドも苦戦だ。

デザインの進化

世の流れは二通りある。わが身の今のことで頭がいっぱいの人々が主となって作りだす流れと、未来世代や野生動物植物にまで心を配る人が創りだす流れの二つだ。そのいずれの流れに自分達の未来を託し、情熱を傾けるべきか。企業は選択を迫られている。
その選択はデザイン思想を左右する。ドイツやアメリカでは「消費者に売りつけるためのセールスプロモーション」としてのデザインから、「消費者が買った後のことや、要らなくなつて捨てる時のことまで配慮したカストマーズケア」としてのデザインへと転換する企業が続出している。モデルチェンジも、企業のためではなく地球のためにする。つまり、企業を「世直しの道具」と位置づける企業思想の台頭である。
世の中から動物実験をなくそうと叫んで創業したボディースョップ社や、よりよき地球環境を未来世代に引き継ぐために企業を再生させたバタゴニア社が我が国でも広く支持される時代になった。
これらの企業の共通点は、賢い消費者が

選択するであろう望ましいライフスタイルを研究し、そこで必要とされる商品開発に取り組んでいることだ。そして、そうした努力を傾ける証としてブランドを生かしている。

大進化する時代

本来、タオルは安定した需要が望める底固い市場であり、地道な努力が求められる品目である。それは、易きにつかず、浮かれず、自分たちには厳しいが、人と地球に

やさしい企業へと進取的に進化することを求めている。つまり、その厳しさに誇りや自信を見出し、その優しさに存在意義を見出す企業へと進化することが期待されている。

問題は、進化には二通りあることだ。一つは、恐竜やサーベルタイガーが牙や図体を大きくして生き残ろうとしたような進化的で、小進化と呼ぶ。他は、両生類から爬虫類へ、爬虫類から哺乳類へとといった生きる

仕組み自体を改める大進化である。二十一世紀は大進化を求める時代、と私は見ている。

世の中では、恐竜のように巨大化を競う統合や小競り合いが目立つが、それはやがて惨めな結末に終わるだろう。安売り競争や、そのために重なる無理も、かえって高くつくことを思い知らされるだろう。

今治タオル産地は、二十一世紀が不可欠と見る産地を目指して大進化すべきだ。

パリ北駅から約三時間、列車ユーロスタ1にゆられてユーロトンネルを抜ければ、そこはロンドン。同じヨーロッパでも大陸側と全く異なる文化を持った国——女王陛

まず訪れたのが、英国を代表するインテリアの店コンランショップ。さすが本場だけあってミシュランの古い建物の中に、世界一洗練されたシンプルモダン、の数々が

生活の中のタオル 海外の暮らし——英国篇

ロンドンで タオルを さがす



論いずれも無地であり、色で勝負。日が短く暗く寒い季節がやってくると、ヨーロッパの人々にとって家の中で過ごす時間が長くなるのは当然のこと、暖かさを感じるタオル

下の国・英国でのタオル事情はいかなものか……英国らしいクラシックなホテルの一室をとり、ブリティッシュ・タオルにせまるべくロンドンの街を巡る旅が始まった。

溢れている。シダー（ヒマラヤ杉）の香りに誘われるまま、バスグッズのコーナーにたどり着くとそこには白木の長テーブルに蘭の鉢植えと生成りや白のタオル、ソープ、

であった。では、王室御用達の百貨店ハロッズのタオル売り場は……と訪ねてみると、白のタオルが中心。ハロッズらしい上品な女性マ

二十一世紀が許容する豊かなライフスタイルを研究・提唱し、そこで不可欠となる商品開発をしなければいけない。個々の企業はそのために情熱と努力を傾け、その証としてブランドを生かし、むくわれるに値する努力を着実に傾けないといけない。モノ売り競争では限りがある。消費者の信頼を集積する競争に切り換えれば未来は限りなく明るくなる。

ネージャーと話す機会があつて尋ねてみると、まずハロッズの文字を刺繍したタオルを作っているのは、1850年創業の「CHRISTY」。まさしく英国を代表するブランドだそうで、別の百貨店では15色のカラー展開を揃えていた。それから目にとまったのが麻66%・綿34%で「麻をルーブ状にし、自然の色を大切にしたい身体に優しいタオルです」という但し書きのタグのついた「LAMONT」。こちらも150年以上続く北アイルランドのブランドだそうである。フランスでは見かけない細長い形の物を見つけたので購入。使ってみるとにした。日本の手ぬぐいの半分程の幅で長さは倍あり、背中用とのこと。同じコーナーには他にイタリア製で縁に繊細なレースのついた高価なタオルがあった。パッキンガム宮殿のバスルームにあるのはこんなタオルかしら……そんなことを思いながらロンドンを後にした旅だった。

私とタオル

各界で活躍中の方々に
タオルへの想いを
寄せていただきました。



1964年 東京生まれ
父、羽仁直の東アフリカ動物撮影に同行
(9~11才)。
1987年より、香港在住。
ビデオドキュメンタリー及び映画の製作並
びに書籍発行など幅広く活動。

ライナスの毛布

メテオ・プロデューサー 羽仁 未央
子供の頃の思い出には、いつもタオルが一緒。

例えば祖父や祖母の葉山の家で撮った写真では、私は白いタオル地の腹掛けをして寝転んでいる。(この腹掛けはまさに金太郎カットのやつで、真ん中に「金」と書いてないだけ幾分マシだが、それにしても他人には一生見せられない姿とは思って。個人的には懐かしく暖かい気持ちになる写真なのだが)

それから、これも祖父のうちにあった「東京オリンピック」のバスタオル。あの頃海に泳ぎにいくと、祖父がいつもそのタオルを持って「おい、もうそろそろ上がれ

と、くまのことだけは今もその手触りまで覚えている。タオル地の表に小熊の模様がたくさん付いていて、裏はコットン、だいぶ薄汚れていたけどそれはもちろん私が汚したのだそのクタクタ感がまた良かった。そう、あれは私の「ライナスの毛布」。

それがあれば世間のどんな荒波も乗り越えられそう、お守り天使、だった。だからその頃の私の最大の悩みは、夜寝ている間に家が火事になった場合、「くま」と猫、そして父(この三つが当時の私の大切なすべてだったのかしら……)をどうやって一度に助け出すか、で、2つや3つの娘にとって、燃え盛る火の中を、暴れる猫

自分の倍以上ある成人男子の父親、そしてタオルケットである「くま」を、抱えて逃げるのは至難の技に思えた(いや実際、それ

は至難の技でしよう、もしほんとうにやっとなら)今から考えると、猫や「くま」はともかく、なんて父まで私が運ばなくてはならないと思ったのかは全くの謎だけど、とにかくそれを考えると心配で心配で、眠れなくなるから「どうぞ今夜も火事になりませんように」と、お祈りしたものだ。

その祈りも空しく、「くま」はその後大人の手によって処分されてしまったけれど



1933年 今治生れ
1956年 スペイン国立マドリッド音楽大卒
特賞ルクレシアアラナ賞、モーツァルト賞などを受賞
1958年 イタリア ミラノに留学
日本・スペイン歌の協会 会長
1989年 今治市功労賞 受賞

世界を翔る 今治のタオル

声楽家 今井久仁恵
まだ子供の頃、泉川の両側にはタオル工場が並んでいた。きつい晒しの臭いがするのでよく走って通り抜けたりしたのを覚えている。

た。

私の家の中には今治のタオルがいっぱい。洗面所、バス、台所などにも使っている。特にトイレにはハンカチ大のタオルをお手拭きに置いてある。一回ずつ使用して洗濯する。家に来る人達が清潔で気持ちいいと喜んでくれる。

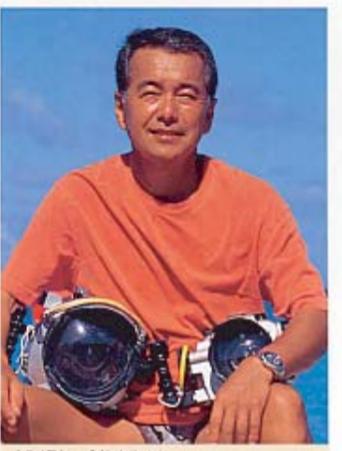
私はホテル・ニュー・オータニへ時々行くことがある。地下の駐車場からロビーに向かう途中タオル製品専門の店がある。ヨーロッパからの輸入品ばかりらしい。タオルとは思えないカラフルでずき。バスロールや部屋着はもちろんのことだが、袋類、ハンドバッグではないかと思われるもの等、タオルで作られたものばかりが店せましと並んでいる。ずきな色彩や柄などで作られた薄目のタオル地などタオルとは思えないくらいすてきた。

お年寄りにはタオルの肌触りは「ほっとするものがある。」と書いてあったのを見た。その通りですが、お年寄りに限らず肌触りがよいので、夏など外出する時もシャツに、ドレス等にも思い切った華やかな色彩が楽しめるというですね。タオル地にも若さや美しさも期待している。今までに使用していた実用的なものにとどまらず、今治のタオルが世界のタオル界の華となってくれたいことを期待している。

昨年五月一日「しまなみ海道」が開通した日、80名の門下生を連れて今治港でオペラ「椿姫」の乾杯の歌を歌ってお祝した。その時の一行は一人残らずタオル工場に案内され、両手に抱え切れぬほど買い物

した。中には面白いものもあったらしい。

永年ヨーロッパに住んでいたのでも感じていたことは、日本人は欧米人に比べると控えめで、自己表現なども割合に引込み思案なところがあり、色彩なども地味なところがある。現在ではだんだん国際的感覚になってきたと思う。



1947年 今治市生まれ
1969年 専修大学卒業
1975年 フリーカメラマンとして活動始める。
1984年 フォトライブライアー
株式会社 マリンプレスジャパン 設立
1999年 写真展開催(今治市)

海の風とタオル。

海洋写真家 武内宏司

タオル、今治、という言葉の響きは私にとって同じように大切な物のように思える。子供の頃、家の横にある小さな川の水の色は赤、緑、茶色と毎日のように変わった。上流にある染色工場からの排水だった。その工場の敷地には染め上がった糸が青空の下に干してあった。タオルの町今治ではどこにも見られる風景だった。

その頃は夏になると家の近くの天保山海水浴場へ先にタオルを巻き、パンツ一枚で走っていった。そこでは泳いだり、ボートに乗ったり、ヤスで魚を獲ったりして一日中遊んだ。

ニューヨークのメトロポリタンオペラハウスを始め欧米各国や国内での数えきれない公演を行った時、私のトランクの中にはいつも今治のタオルが入っていた。

今後、今治のタオルが世界のタオル業界の華となってくれることを期待して止まない。

大学進学で東京に行き、趣味で覚えたスキューバダイビングをするうちに、水中写真を撮るようになった。その後、プロのカメラマンとして沖縄を中心に撮影をはじめ、太平洋、インド洋、カリブ海、南極などへと広がっていった。写真の内容も水中写真、空撮、海岸風景、海の動物、船などと、一端して海にこだわって撮り続けてきた。

海辺にすることが多いので、潮風に吹かれたり、海水に濡れた体や器材を拭くためにバッグには必ずタオルを入れている。ホテルのタオルを使うこともあるが、小さくたためる日本のタオルの方が便利なので2本くらい入れておく。海外に行く時は荷物が多くなるので、なるべく小さくて軽い物を選ぶ習慣になっている。今治にはタオル関係の知人もいて、もうう事もあり、家にはいつも余分なタオルがある。海外に行くときおみやげに持っていくと、良質の今治タオルはとても喜ばれる。私自身もタオル製品はとても好きで、夏はタオルケット、冬はタオル地の毛布を使っている。その肌



触りがとても気に入っている。仕事で海に行き、ホテルに帰ってから潮風をいっぱい浴びた体を熱いシャワーで洗い、洗いたてのふわっとしたバスタオルに包むと気持ちがいい。私のお気に入りの海であり、毎年何度か訪れる南太平洋のタヒチやカリブ海の島々は貿易風帯で、一年中安定した東京の風が吹いている。ここではホテルに着くとすぐにライムを買って部屋に置いておく。海から帰ってシャワーを浴びたあと、冷蔵庫に冷やしておいたグラスを出し、氷とジンを入れ、ライムをたっぷり絞った特製のジンライムを作る。バスタオルを腰に巻いて海の見えるベランダで心地良い風に吹かれながらゆつくりと飲む。こうしていると明日の撮影のイメージがゆつくりと湧いてくる。

タオルでひとやすみ

— いしゅ 慰藉の意味 —

物が溢れ便利になれば、それに反比例してどうも心は貧しくなる。マザー・テレサは日本を訪れた時「日本は貧しい国だ。」と言った。それは「何か必要なものを欠いている」と言うレベルで考えると、人間は物質的（経済的）満足では幸福を手に入れることはできないということになる。どうも心の豊かさとは、美味しい空気、川のメダカや、土の中のミミズ、螢の群舞、トンボの遊泳、大地の恵みが人間のすぐそばにあることではないだろうか。

瀕死の病人の傍らで、ひたすら撫でさする「慰藉のおこない」マザー・テレサの皺のよった手は、織り上がった輪奈（タオルのパイル）のように、肌や体や心の芯にまで心地良さを与え続ける。

男のペニス、女であれば子宮まで感じるやさしい響きを持った「タオル」の世界。それは慰藉の世界であり、表面的なデザインやいたずらに名前を織り込んだブランドではなくマテリアル（素材）にのみ通用する世界かもしれない。ペニスや子宮がつながり合って生まれてくる赤ちゃんの回りにも、タオルが主人公としてその役割をまっとうできているのであろうか。

顔に深い皺を刻んだマザー・テレサの鷹のような眼（瞳）は、生命をさすり続ける彼女の手と同じような心のやすらぎや豊かさを、タオルにも感じさせるものがあることを見通している。

さらなる物質と便利による景気回復もよからう。然し、それが何のための景気回復かと考えるときに、その奥にあるマザー・テレサの瞳と、手に握っているタオルに思いを馳せるならば、将来の映像が見えてくるはずだ。今治の町から、そんなタオルを産み出したい。

この産地の「モノ作り」の思いが、人々のライフスタイル、消費市場、流通市場を変えられるなら、主体性のある産地メーカーに脱皮するだろう。もし、今治産地メーカーの「モノ作り」の思いが、社会や経済を変えていくことができれば、今治タオルは、マザー・テレサの「手」の代りとなり、産地メーカーのパワーは人々に「驚愕」と「未来」をもたらすだろう。そうなれば、今治タオルは子宮を通して赤ちゃんに伝わる「響き」を持っているということであり、いつかは慰藉を続けたマザー・テレサの手の代りを努める今治タオルを見届けたいと思う。

四国タオル工業組合
理事（集積活性化委員長）
宮崎 弦



服飾デザイナー 塩野秀三

間を感じさせる布

私の足元に犬がいる。無意識のうちに犬の頭をなでまわしている。さわっていると気分がほぐれてほっとする。今タオル織機で織った生地を膝元で何回も何回もさわっている。これもさわっていると手放したくなる。気持ちがあらゆる。タオル織機で織った生地はふあっとして間がある。この間に含んだ空気が気持ち良くしてくれるのだろうか。いずれにしても優しい顔をした生地だ。



様々な表情、ユニークな性格を持った「布達」で作るクリエイティブなテキスタイルファッション。触ってみると予想外の軽さ、思いがけない質感、心地良さに驚かされる。ジャケット、ハーフコート、Tシャツ、トランクス...

お部屋の温度や湿度、音、光などを自然な優しさでコントロールし、生活空間を満たす「Towelling」。ベットカバー、テーブルクロス、ランチョンマット、カーテン、クッション等のインテリアアパブリックに展開されています。

Towelling

Warp Thread

経系の張力（テンション）差による膨らみの布
(papa, mama, baby, のファミリークロス)
— タオル織機 —

寝床のタオルカバー

大阪教育大学教授 小田迪夫



1936年 岐阜県高田町生まれ
1964年 広島大学大学院卒業
全国大学国語教育学会員 受賞

近頃、寝る時にタオルを愛用している。長さ百五十センチくらい、幅八十センチ余りもある大型のタオルを、掛け布団の首や肩に接する辺の全幅を覆うカバーとして使うのである。

このタオルカバーはまことに具合がいい。名の知れたデザイナーのインシヤルが刺繍されているが、そのマークと使い心地とは何の関係もない。首から頸にかけての覆い心地のよさは無類である。ネルのような密なやさしさはないが、さらりとして少しもまとわりつかず、さりげなく首と頸に接してほどよい暖かみを感じさせる。

私は、生まれつき虚弱だったせいもあるが、厚着好きの母親から、冬は厚着しないと過ごせないような寒がりに育てあげられた。冬、着物を着て足袋を履くと足首が寒いといった寒がりである。夜は布団に寝て肩がすっきり隠れるように上布団をかぶせてもなお首がスースーする。そこで、頸がすっぽり隠れるように首の所まで布団を引

き上げて眠る。すると布団カバーがすく汚れるというので、女房が布団を引き下ろす。しかし首のスースーが気になってすく布団を引き上げる。女房がまた引き下ろす。そんなことを繰り返してきたが、この大きなタオルで布団の枠を覆うことで問題は解決した。

やさしいタオルは良質なワインの風合い

ホテルマン 吉岡多聞



1948年 今治市生まれ
1967年 株式会社ダイヤモンドホテル入社
1973年 株式会社オークラ入社

ホテルマンになって三十数年、日本のホテルを代表するホテルオークラでソムリエとしてワインのサービスにあたっております。今、私が担当しておりますソムリエの仕事はお客さまが選ばれたメニューに合うワインをアドバイスし、ワインを最高の状態でお出しし、お食事を楽しんで頂くこと

です。私が心掛けていることは、柔らかく暖かい気持ちでお客さまに接すること。これはタオルの持つイメージと同じなのです。ワインも同じ。良いワインの味は、コクが有り繊細で新しいタオルの肌触りのような口当たりなのです。

今治は山海の幸に恵まれた、ワインを楽しむには理想的なところ。ワインと料理を合わせる基本は、味の軽い食材には軽いワイン、濃い食材には重いワインを、白、赤、ロゼ、スパークリング、とにかく飲んで楽しんで欲しいのです。今までたくさんVIPの方々にサービスしたましたが、一番緊張し、嬉しかったのは女優の吉永小百合さんにお出したジントニック一杯です。手が震えました。私にとってのタオルは故郷であり、みかんと共に誇りにしているもの一つです。

く今治へ映画を見に行った。文芸映画は子どもに退屈だったが、あとで喫茶店に行き、コーヒーの香りやアイスクリームの味を楽しんだ。島では味わえない味だった。

戦後の今治の味の傑作は「権太」の母恵夢であろう。母恵夢のごとく全国を席巻する今治タオルの知名度を上げることを大いに期待したい。